

大境遺跡発掘調査報告書

県立倉吉養護学校グラウンド造成工事に係る埋蔵文化財発掘調査

平成16年度
倉吉市教育委員会

おお ざかえ
大境遺跡発掘調査報告書



遺跡略号 2MNO

平成16年度
倉吉市教育委員会

序

この報告書は、鳥取県が実施する県立倉吉養護学校グラウンド造成工事に伴い、平成16年度に鳥取県倉吉市長坂町字大境において行った発掘調査の記録です。

今回の調査は遺跡全体のうち進入路計画部分の限られた調査でしたが、縄文時代の落し穴と推定される土壙と中世とみられる柱列の一部を確認することができました。

この報告書を多くの方々に活用していただき、埋蔵文化財への理解を深めていただく一資料となれば幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましてご協力いただきました地元関係者、鳥取県教育委員会事務局教育環境課、県立倉吉養護学校、鳥取県中部総合事務所県土整備局をはじめとする関係機関の方々に対し深く感謝の意を表するものです。

平成17年3月

倉吉市教育委員会
教育長 福光 純一

例　　言

1 本報告書は、県立倉吉養護学校グラウンド造成工事に係る事前調査として、平成16年度に倉吉市が鳥取県（鳥取県教育委員会事務局教育環境課）の委託を受け、鳥取県倉吉市長坂町字大境において実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2 調査体制は次のような組織・編成である。

調査主体 倉吉市教育委員会

事務局 倉吉市教育委員会事務局文化財課

福光 純一（教育長） 河本 篤史（教育次長）

眞田 廣幸（文化財課長） 佐々木英則（文化財課長補佐兼文化財係長）

森下 哲哉（文化財係主任） 根鈴智津子（文化財係主任）

加藤 誠司（文化財係主任） 岡平 拓也（文化財主事）

内務整理 竹歳暁子・仲田康子・松嶋あつ子・篠美紀子・山口 瞳・山田陽子・山本千恵美（50音順）

3 現地調査は加藤が担当した。本書の執筆は加藤が行った。

4 第1図（地形図）は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「倉吉」「泰久寺」「伯耆浦安」「関金宿」の一部を複製・加筆した。

5 挿図中の方位は、国土座標の北を示す。

6 調査によって得られた資料は、倉吉市教育委員会が保管している。

本文目次

I	発掘調査に至る経過	1
II	位置と歴史的環境	1
III	調査の概要	6
1	遺構	7
2	遺物	7
IV	まとめ	9
報告書抄録		

挿図目次

第1図	倉吉市周辺の地形と遺跡分布図	3
第2図	大境遺跡調査区位置図	4
第3図	大境遺跡遺構全体図	5
第4図	1号・2号・3号土壙、1号柱列遺構図	6
第5図	出土遺物図	8

写真図版

- 図版1 遺跡 調査前全景 調査後全景
図版2 遺構 1号土壙 2号土壙 3号土壙 1号柱列
図版3 遺物 出土遺物

I 発掘調査に至る経過

平成14年に鳥取県教育委員会教育環境課より倉吉市教育委員会文化課へ、県立倉吉養護学校グラウンド整備事業の計画が提示され、埋蔵文化財の有無が照会された。当該地を倉吉市教育委員会が踏査したところ遺物の散布が認められたため、翌年の平成15年9月～10月に試掘調査を実施した。その結果、予定地全域で遺物が出土し、土壌・水田跡が確認され、遺跡が存在することが明らかとなった。^{註1}市・教育委員会は県・教育環境課と協議を行い、遺構が存在する部分のうち進入路の300mについて、発掘調査を行なうことになった。調査は倉吉市教育委員会が主体となり、平成16年5月27日～6月30日まで現地調査を実施した。

註1 加藤誠司「長坂町地区」『倉吉市内遺跡発掘調査報告書13』倉吉市教育委員会 2005

II 位置と歴史的環境

大境遺跡は、倉吉市街地から南西に約3km離れた倉吉市長坂町字大境に位置する。調査地は、鳥取県中部地方を流域とする天神川支流の小鴨川右岸で、南から北へ延びる丘陵が枝分かれして小鴨川に向かって落ち込む先端付近である。周辺の現況は、低地部分が水田で、丘陵地は畑地と水田が混在するが、新興住宅地も近接している。標高は約40mである。

この地域の遺跡は丘陵縁辺部を中心に遺跡が確認されている。以下、遺跡分布図を中心に概要を述べる。

旧石器時代の遺構・遺物は小鴨地区では未確認である。市内全域でも遺構は未確認であるが、丘陵の末端近く長谷遺跡・中尾遺跡でナイフ型石器、上神51号墳下層で細石刃石核が出土するなど遺物数が徐々にではあるが増加している。

縄文時代の遺跡は、主なもので20箇所余りが市内で確認されている。その多くは、落し穴を確認したもの、あるいは遺物が出土したものである。市内の主な落し穴の遺跡として、縄文時代前期～中期と推定される落し穴84基を確認した中尾遺跡、後期中心とみられる落し穴57基を確認した長谷遺跡がある。大境遺跡と同一丘陵の先端近く、約0.6km北にある下西野遺跡（13）は、丘陵東斜面と尾根筋の鞍部で27基の落し穴を確認した。住居址は取木遺跡で2棟、津田峰遺跡で1棟調査されたが、調査地付近では未確認である。

弥生時代の遺跡は調査地付近では未確認である。集落は、市街地西郊の通称久米ヶ原を中心に存在する。その多くは古墳時代まで継続する。前期は船沖遺跡で土器が出土、中期は拠点的集落と推定され鳥形スタンプ文土器が出土した中峯遺跡、環濠をもつ後中尾遺跡、福田寺遺跡1次・3次調査、中期～後期の集落で破碎鏡の出土した高原遺跡、などがある。後期は服部遺跡・中峯遺跡・後中尾遺跡・白市遺跡・コザンコウ遺跡・大山遺跡・觀音堂遺跡などがある。

墳墓は前期の土壙墓群であるイキス遺跡、後期の阿弥大寺四隅突出型墳丘墓（国史跡）、方形墳の三度舞墳丘墓、終末期から古墳時代前期に連続する土壙墓と古墳群（方墳）がある二夕子塚遺跡などがある。

倉吉地方の古墳時代前期の首長墓は、調査地周辺には存在しないが久米ヶ原丘陵末端付近、国の重要文化財である夔鳳鏡・三角縁神獸鏡・鉄製農工具が出土した国分寺古墳（前方後方〈円〉墳・全長60m）を初現とする。5世紀代は、三角縁神獸鏡・鍬形石・琴柱型石製品が出土した上神大将塚古墳（直径30m）がある。中小規模の古墳は、駄道東遺跡・頭根後谷遺跡・服部古墳群など主に箱式石棺墓を主体とする古墳群が形成される。

6世紀中頃には東伯耆に横穴式石室が導入される。首長墓として、調査地の南西約1kmの隣接する丘陵先端に

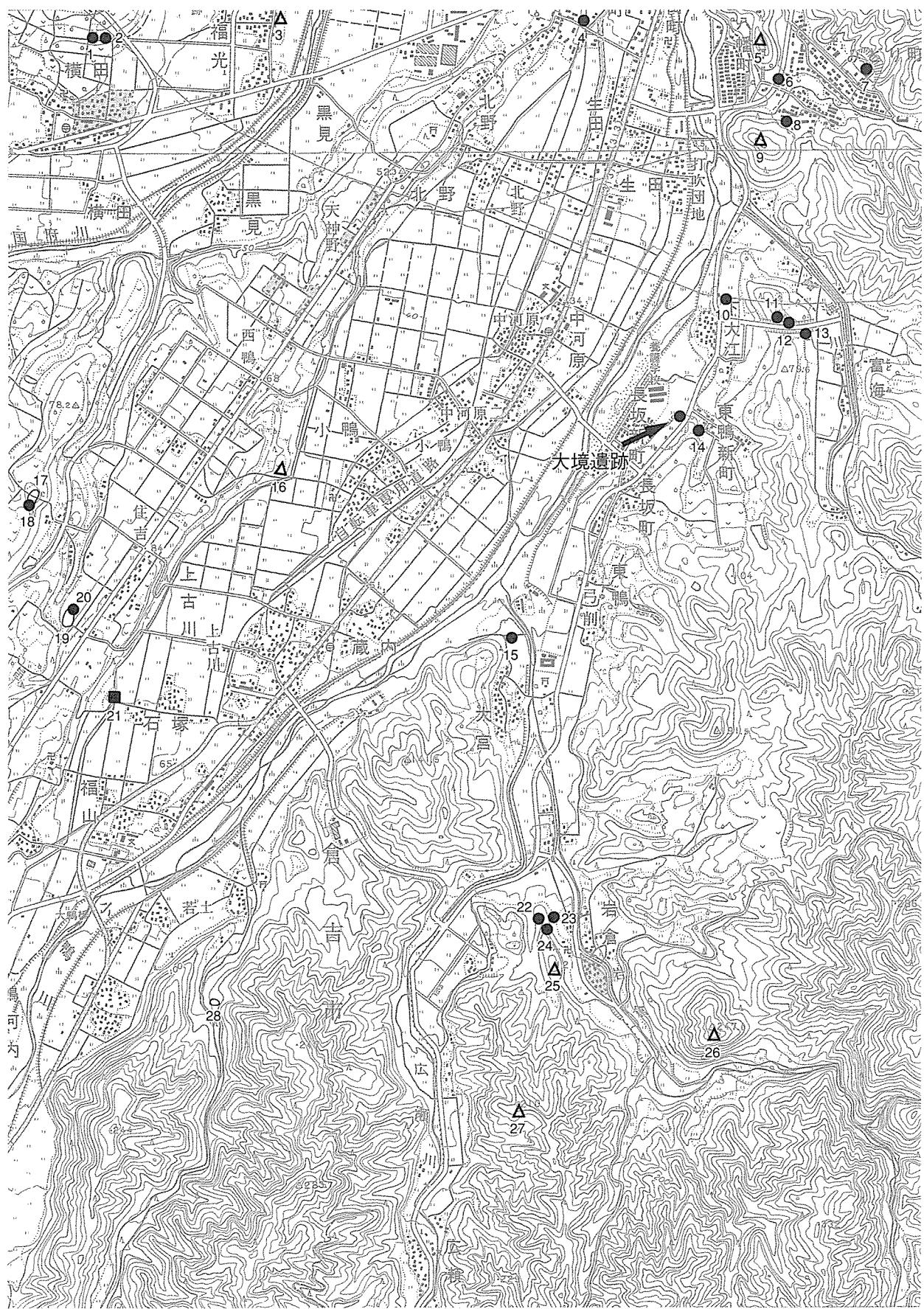
大宮古墳（15・円墳・直径28m）が、続いて6世紀後半にその上流約1kmの丘陵先端に家ノ後口1号墳（23・直径15m）が、6世紀末～7世紀初頭に家ノ後口2号墳（22・直径14m）が築造される。相前後して、前述の下西野遺跡の直ぐ北西側丘陵、山際1号墳（12・直径10m）は6世紀後半に築造される。1号墳から西へ約30mの地点にある山際2号墳（11・直径10m）は7世紀中頃の築造である。これら、横穴式石室を主体とする古墳は小鴨川中・上流域で系譜がたどれる。

奈良時代の倉吉は、伯耆国府、国分尼寺と推定される法華寺畠遺跡、伯耆国分寺、国府関連遺跡と推定される不入岡遺跡が近接し設けられ、伯耆国の中心地として栄える。寺院跡として7世紀中頃に銅製匙・銅製獸頭が出土した大御堂廃寺、7世紀末に大原廃寺、8世紀には小鴨川の左岸、調査地から南西約3kmの丘陵縁辺部は石塚廃寺（21）が創建される。この寺院は未調査のため詳細は不明だが、塔心礎とその北に金堂とみられる基壇の高まりが遺存する。

平安時代になると小鴨川の上流に池を中心に建物を配置した隣池伽藍の寺院、広瀬廃寺が建立された。

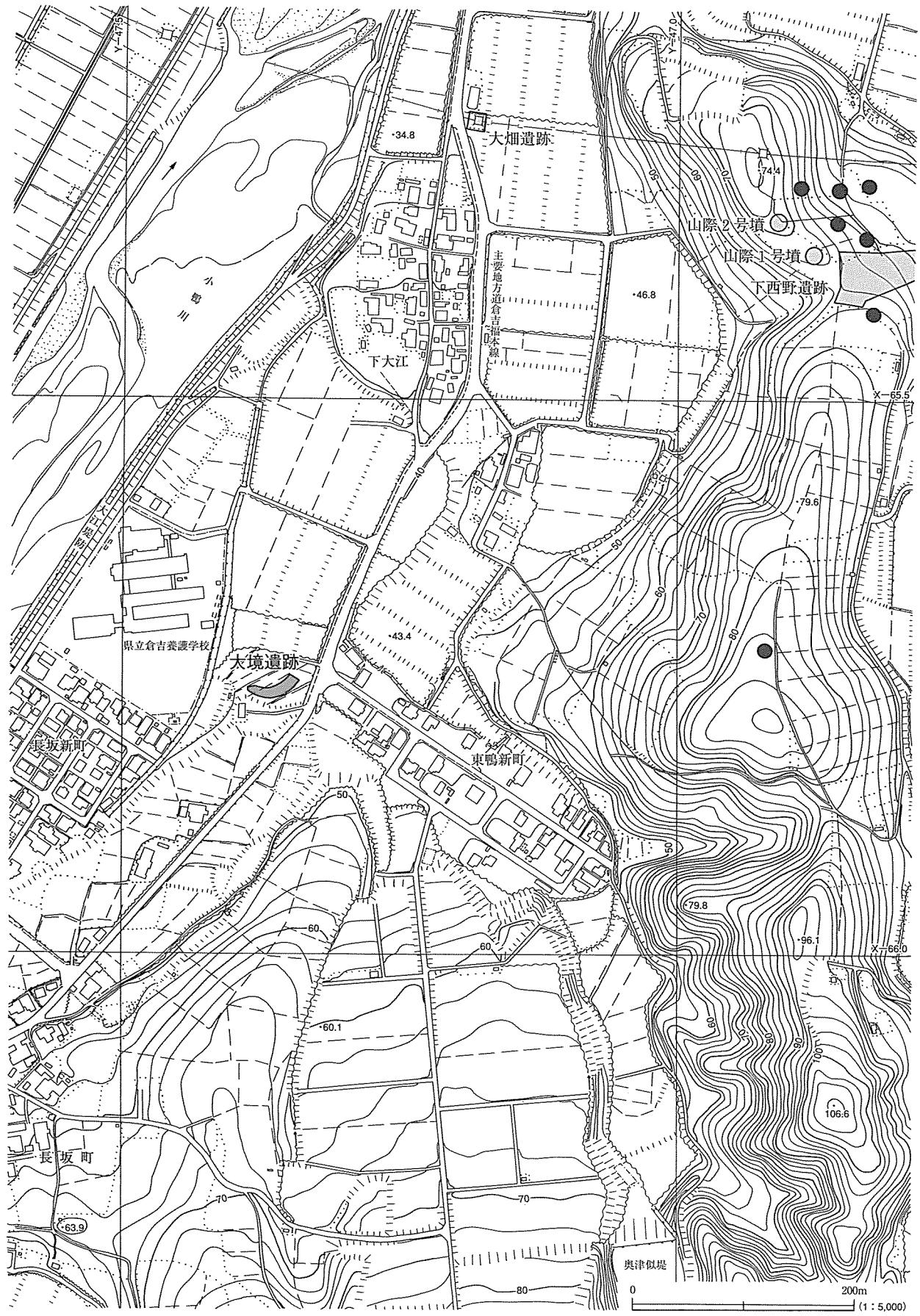
中世の城跡としてはこの地を支配していた小鴨氏の居城の岩倉城と小鴨川を挟んだ対岸には小鴨氏家臣の居城と伝えられる市場城が存在する。下西野遺跡は、中世の火葬墓・墳墓が各1基と、中世かそれ以前とみられる柵列がある。大畑遺跡（10）は、14～15世紀と推定される幅約4mの溝とピット群が確認されている。

1 矢戸遺跡（第2次）	7 高畠古墳群	13 下西野遺跡	19 野畠古墳群	25 家ノ後城跡
2 矢戸遺跡（第1次）	8 宮ノ平ル遺跡	14 東鴨遺跡	20 野畠1号墳	26 岩倉城跡
3 今倉城跡	9 赤岩城跡	15 大宮古墳	21 石塚廃寺	27 広瀬城跡
4 空岡田遺跡	10 大畑遺跡	16 市場城跡	22 家ノ後口2号墳	28 釜谷たら
5 四十二丸城跡	11 山際2号墳	17 後口野古墳群	23 家ノ後口1号墳	
6 芸才寺1号墳	12 山際1号墳	18 後口野1号墳	24 家ノ後口1号古墓	

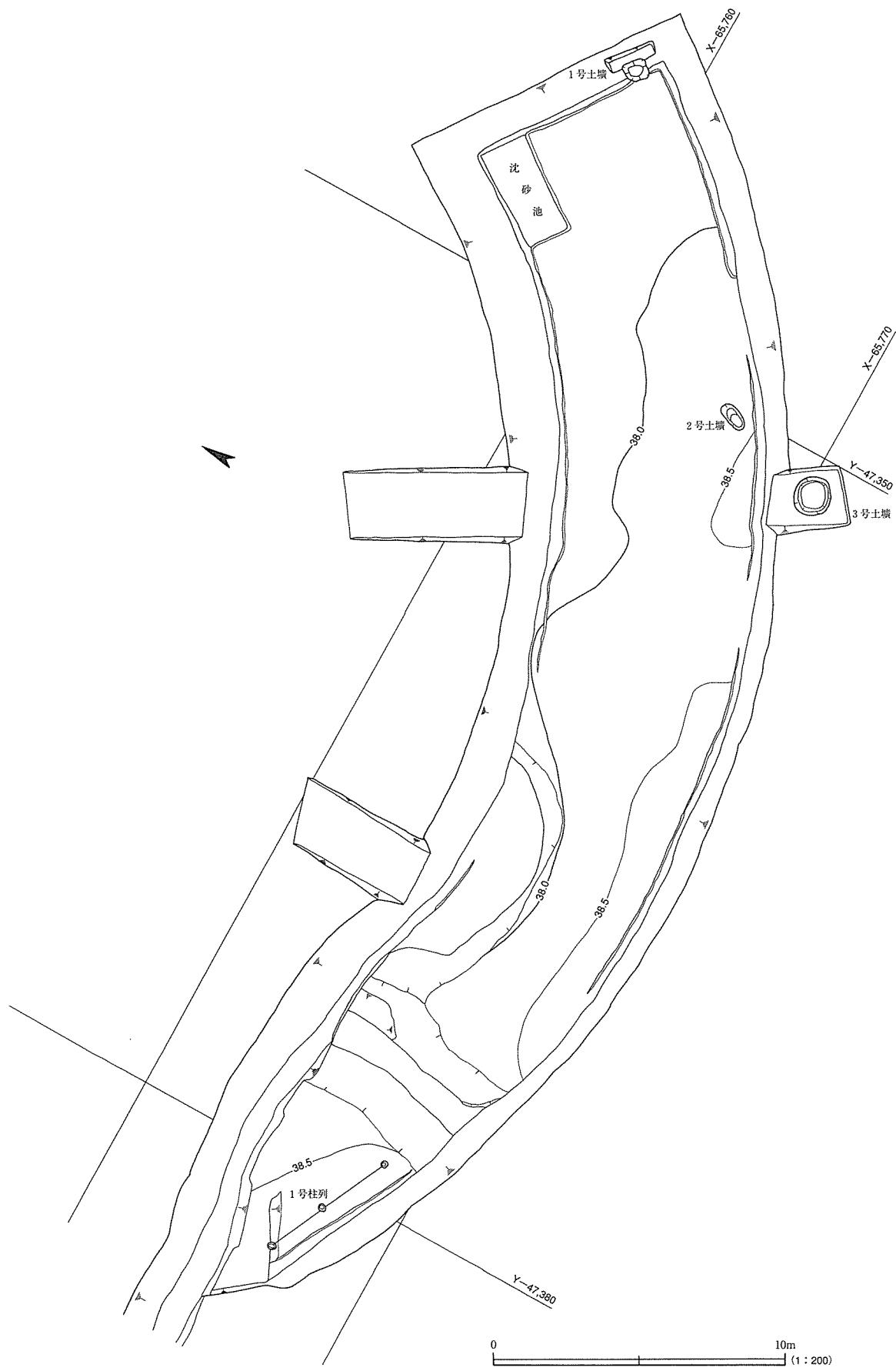


第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

(1 : 25,000)



第2図 大境遺跡調査区位置図



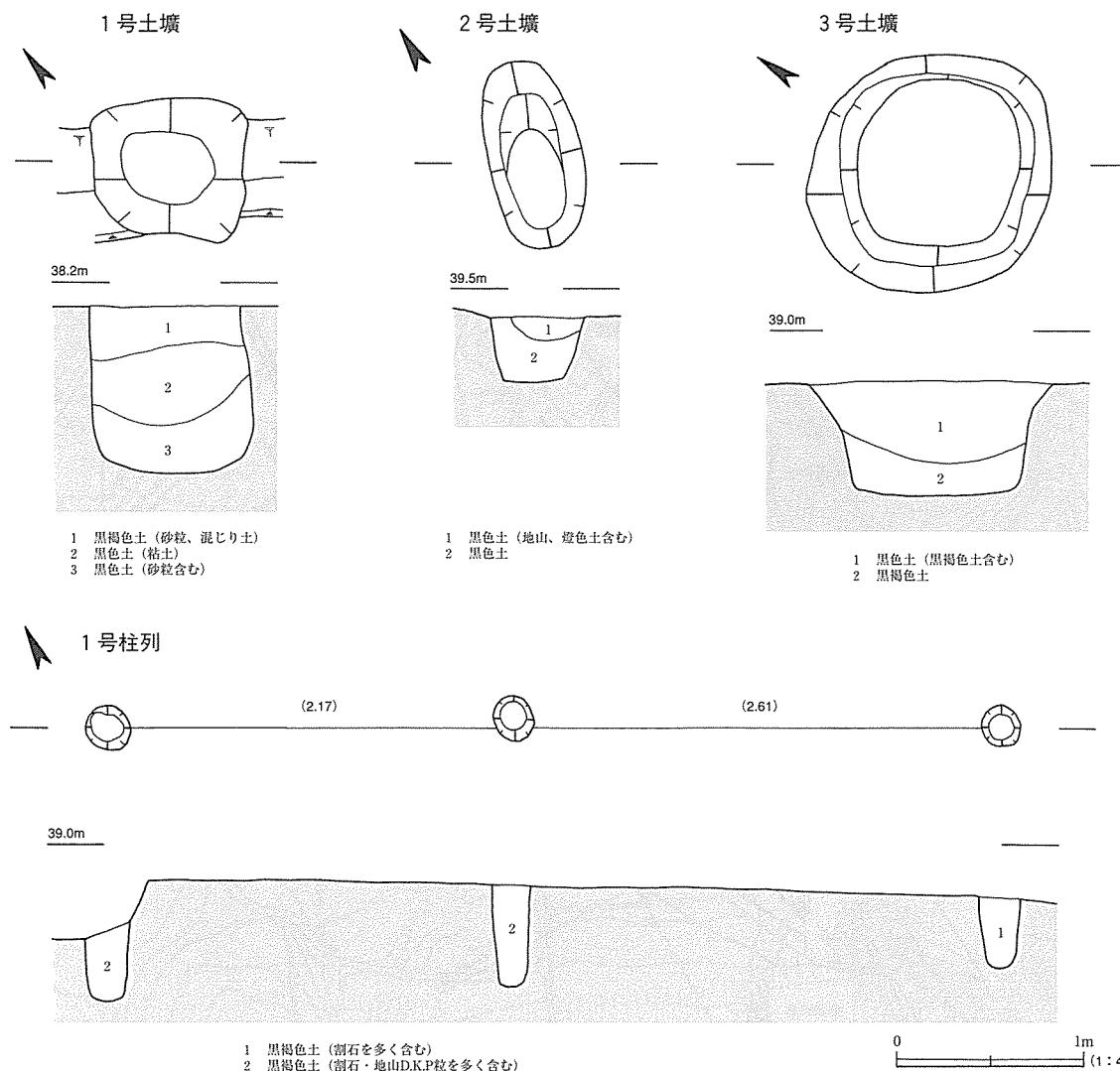
第3図 大境遺跡遺構全体図

III 調査の概要

発掘調査は、南から北に向かって下る段々の旧水田跡で、旧地形は北へ延びる尾根が川に向かって落ち込むほぼ先端付近である。北東から南西に蛇行するカーブを描きながら下る進入道路計画部分のうち、遺構の存在する300mについて行なった。

基本的な層序は上から、①旧水田耕作土、②黒褐色粘質土、③灰色～白色粘土（西側は一部黄白色粘土）である。遺構検出は③で行なった。調査時は、調査区の周囲を先行して掘り下げて排水に努めたが、山側からの湧水が多く、沈砂池を設置して當時ポンプアップする状態であった。その他、遺構ではないが、1号柱列の東は浅い谷があり、発掘後は小川状に水が流れる状況であった。また、調査区東側は粘質土に砂が混じっており、幅数十cm程度の溝状となる。水が流れているものと推定される。

調査の結果、土壙3基、柱列1条を確認した。



第4図 1号・2号・3号土壙、1号柱列遺構図

1 遺構

1号土壙 調査区北東隅の法面に半分かかった状態、標高38.0mで検出した。平面は楕円形で、検出面規模—長径0.84m×短径0.76m、底面規模—長径0.5m×短径0.38m、深さは0.9mで、ほぼ垂直に掘り込まれ底面ではまる。埋土からは、遺物が全く出土しなかった。底面は、落し穴の下部施設である杭痕跡の検出を湧水が多い状態で行なったが、確認されなかった。

2号土壙 調査区東寄りの南辺近く、標高39.4mで検出した。1号土壙とは約12m離れる。平面は楕円形で、検出面規模—長径1.00m×短径0.50m、底面規模—長径0.54m×短径0.30m、深さは0.36mである。遺物は全く出土しなかった。

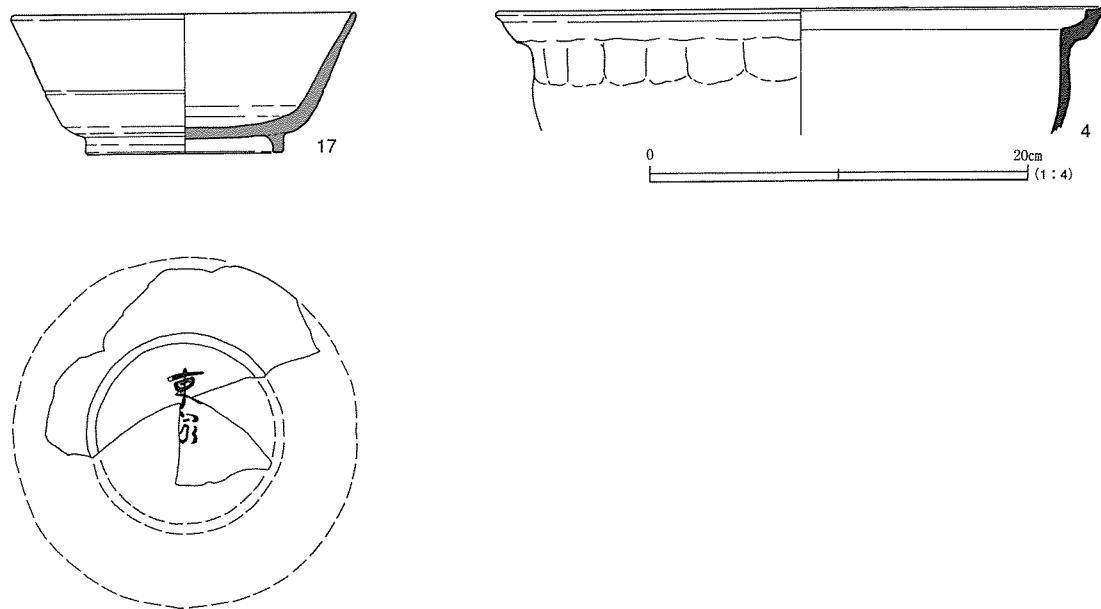
3号土壙 調査区東寄りの南端、2号土壙の約4m離れた標高38.7mで検出した。平面はほぼ円形で、検出面規模—長径1.30m×短径1.25m、底面規模—長径0.88m×短径0.86m、深さは0.62mである。遺物は全く出土しなかった。

1号柱列 調査区西端近く、標高38.7m～38.8mでピットを3個検出した。主軸の方向はN65°Wである。柱間は西側—2.17m東側—2.61mと差がある。柱の大きさはいずれも約0.2m余りで、深さは検出面から0.4m前後だが、底面の絶対高でいうと東に向かって約0.1mずつ高くなる。埋土中からは、各穴から数cm～10cm弱の割石が多数出土した。柱を据えるための根石と推定される。土器は中央のピットから土師器とみられる細片が1点出土したのみにとどまる。柱列の展開は両サイドが削平と谷によって不明であるが、まだ延びていたことも考えられる。

2 遺物

出土遺物は、縄文土器・土師器・須恵器・須恵質陶器・土師器質土器・陶磁器・石器である。遺構埋土中の遺物はわずかで、ほとんどが包含層中から出土した。全体の傾向としては、摩滅したもの、細片のものが多く量的に割合が多いのは古墳時代土師器である。以下、時代ごとに概要を述べる。

縄文土器はいずれも粗製の破片で数点の出土である。土師器1・2は高环の环底部差込み部分である。須恵器3は环の口縁部片。奈良・平安時代の丹塗り土師器片が若干あるが細片である。瓦器鍋4は口縁部片、端部は水平面をなす。内外面ナデ調整。外面に煤付着。捏ね鉢5は底部近くの破片。土師質で、胎土に石粒を多く含む。内面に櫛状工具による条線を施す。6・7は同一個体とみられる白磁の碗Ⅳ片で釉は灰色気味の白色。6は玉縁の口縁部片。7は見込み部分で内面に沈線状の段を持つ。外面は沈線以下の部分は施釉されない。8は龍泉窯系青磁の口縁部片。内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反する。発色は灰色に近い薄緑色。9は龍泉窯系青磁碗Iで鎬蓮弁を持ち、釉は黄色味がある。10は備前焼の擂鉢体部片。11は伊万里焼の染め付け碗片で網手。12は唐津焼の皿。13は敲石で上下に敲打痕がある。14は磨石の小片。15は砥石片。16は剥離痕のある剥片。須恵器高台付环17は試掘調査時(T5)に出土。口径18.0cm・器高7.3cm。口縁部は外傾し直線的に立ち上がる。底部はヘラ切り。底部外面に墨書「東家カ」がある。



第5図 出土遺物図

IV まとめ

発掘調査によって、土壙3基、柱列1条を確認した。分かったことを整理してまとめとしたい。

土壙 3基確認した。平面形は1号が円に近い楕円、2号が楕円、3号が円形とまちまちである。遺物が全く無く、落し穴よくみられる底部施設である杭痕跡もないことから決め手に欠く。しかし、落し穴の多く立地する丘陵縁辺部緩斜面にあたること、落し穴の埋土は、通常遺物をほとんど含まない。当遺跡の土壙は、この条件に合致しており、土壙は落し穴の可能性が高いと判断する。今回の調査はごく限られた部分の調査であるため、3基のみの確認である。したがって、丘陵全体での配置については、周辺丘陵の調査資料の増加を待たれる。

柱列 1条のみを確認した。調査区の端にあって、周囲が掘削を受けているため掘立柱建物であった可能性もある。出土遺物は、土師器とみられる土器小片のみであった。このため時期が不明確ではあるが、柱規模と根石の状況から中世の遺構と推定する。

遺物 いずれも包含層中の出土遺物である。国府期の丹塗り土師器（伯耆国府第2段階）^{註1}が数点と、墨書土器「東家カ」（伯耆国府第2段階前半・試掘調査）^{註2}が1点出土した。白磁6・7は11c後半～12cころ、龍泉窯系青磁碗Iの8は12c中～後ころと推定される。瓦器鍋（14cころ）^{註3}が1点出土した。

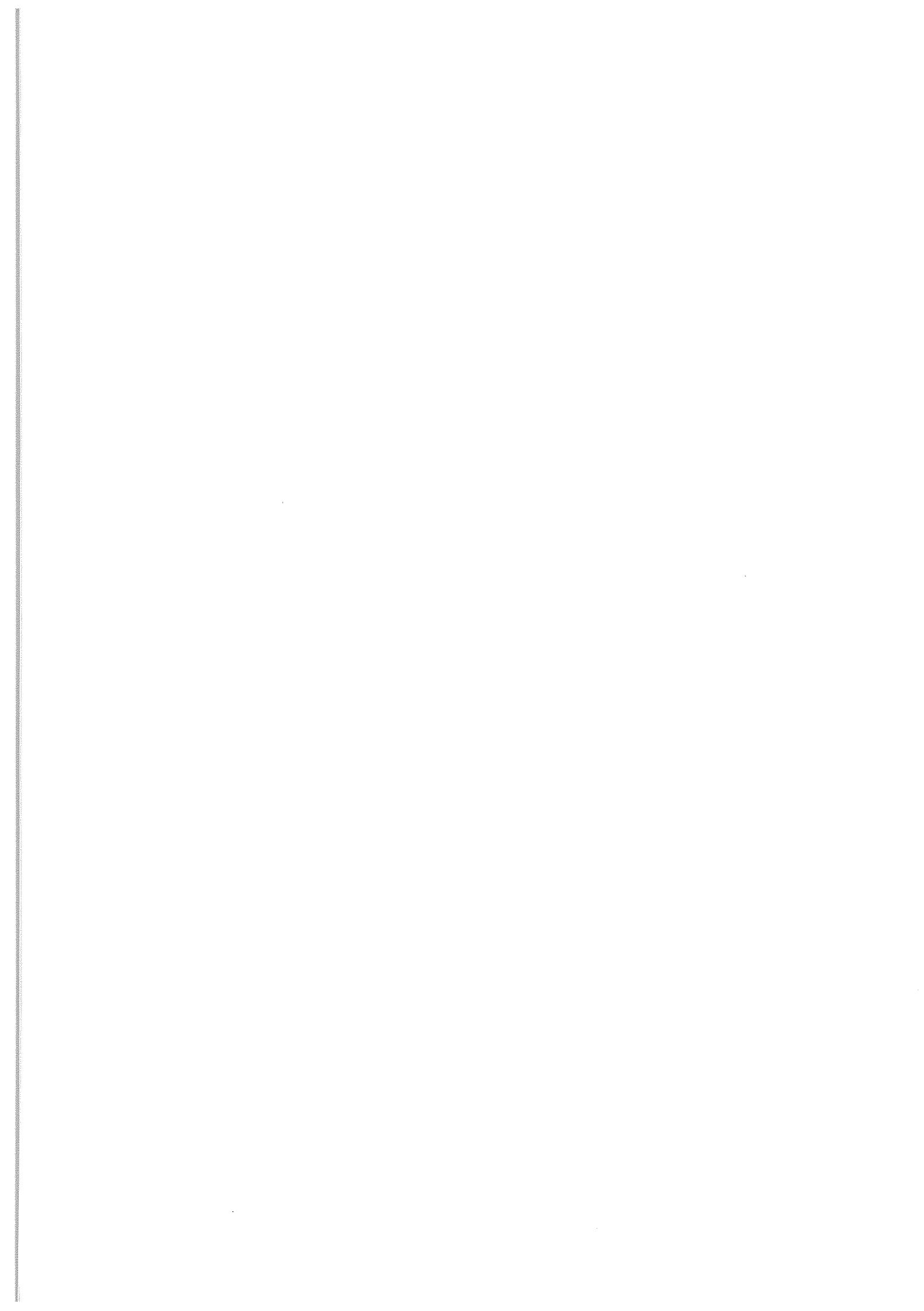
調査区の北側は地形が小鴨川に向かって落ち込むため、集落は南側台地に展開すると考えられる。大境遺跡周辺では北約500mにある大畠遺跡で、14～15世紀の溝とピット群が確認され、城郭に関連する遺構とも推定されている。^{註4}また、北東700mの丘陵東斜面にある下西野遺跡は4条の柵列と中世墓が確認されている。^{註5}今回調査部分はわずかであり、直接に他の遺跡と結び付けることはできないが、包含層から墨書土器や陶磁器が出土しており、周辺に古代から中世の遺跡が広がる可能性もある。

註

- 1 巽淳一郎他 『伯耆国府跡発掘調査概報（5・6次）』 倉吉市教育委員会 1979
- 2 山本信夫 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編』 大宰府教育委員会 2000
- 3 八峰 興 『山陰地方における中世土器の変遷について』『中世土器の基礎研究』 XIII 1998
- 4 森下哲哉 『中国電力八橋線鉄塔建設予定地内発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1988
- 5 加藤誠司 『下西野遺跡発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1997

参考文献

- 森下哲哉他 『大日寺遺跡群発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1995
- 森下哲哉他 『広瀬廃寺発掘調査概報』 倉吉市教育委員会 1979
- 岡平拓也 『下前田遺跡発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 2001



報 告 書 抄 錄



調査前全景（東から）



調査後全景（東から）

図版2



2号土壙（北から）

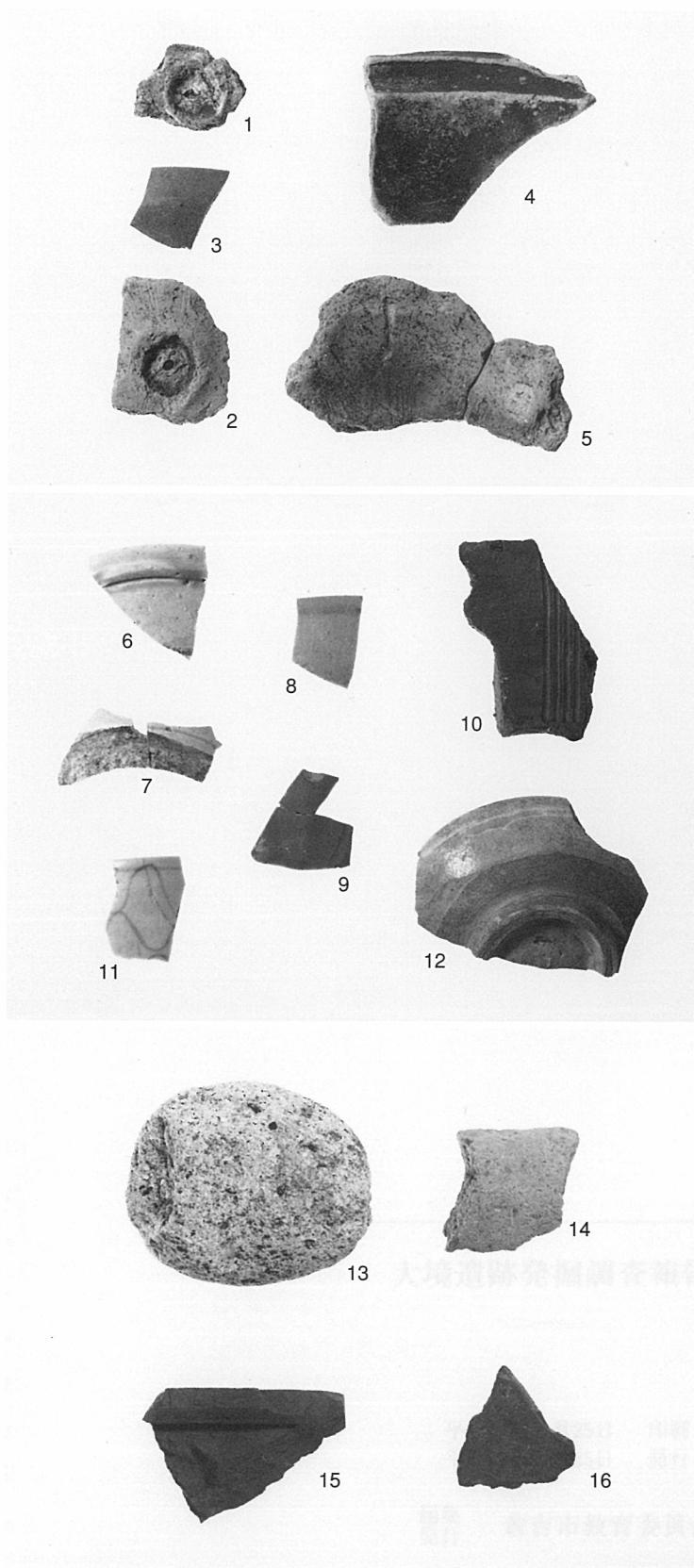
1号土壙（南西から）



3号土壙（南西から）



1号柱列（北東から）



出土遺物 1 : 3

大境遺跡発掘調査報告書

平成17年3月25日 印刷
平成17年3月25日 発行

編集 発行 倉吉市教育委員会

印刷 製本 勝美印刷株式会社
